2025.9.1

現代俳句千葉

158号

巻頭エッセイ

「ほどよい」のススメ

幹事　遠藤寛子

二〇二四年流行語大賞に選ばれた「ふてほど」という言葉をご存じだろうか。正確には「不適切にもほどがある！」というドラマのタイトルだ。昭和から令和の時代にタイムトリップした主人公が価値観の違いに戸惑いつつも乗り越えていく姿を描いたもの。私も主人公と同じ時代を生きてきたが、今になって昭和時代の常識をドラマの中で見ると実に奇妙で、ハラハラしてしまう。自身もその時々の常識に上書きされ続けていることを痛感する。ドラマでは昭和の常識として公共交通機関や路上での喫煙、学校での愛の鞭がまかり通っている。今それらの行為は副流煙や体罰として非常識なものとなっている。昭和の常識＝令和の非常識が次々と繰り広げられる一方で、令和の今、行き過ぎたコンプライアンスに身動きが取れなくなっている人々も取り上げられる。昭和と令和の常識は「ほどほど」でとどまることなくつっぱしり、世間が許容範囲を超えたひどい状態になってしまっていること、そしてそれに気づかない渦中の人々に向け、つっぱしるのを止めて「ほどよい」に落ち着けよ、とドラマの制作陣は警鐘を鳴らす。

俳句界の俳人たちの常識はどうだろう。昭和は実際に集まり、句会、吟行会、勉強会、お泊り会、飲み会が頻繁に実施されていた。結社に所属し師弟関係を結ぶことが俳人としての王道だった。そして二〇二〇年、コロナのパンデミックが発生、以降数年間、密を避け、集まりを自粛する生活が続くこととなった。時を同じくして「夏雲システム」という句会サービスがネットに無料提供されるようになり、自粛ムードに後押しされ一気に俳句界に浸透した。今現在夏雲システム内には二千句会が存在、投句数二万五千句、五百万件の選評が蓄積されている。凄まじい浸透ぶりだ。千葉県現代俳句協会でも、二〇二三年、夏雲を利用した「あしたば句会」を立ち上げた。各自都合のよい時に参加する利便性の高い句会となっている。それだけではドライすぎるので、年二回吟行会を実施。またSNSで写真、メッセージ、俳句のやりとりをしている。これが令和俳句界の常識。昭和と令和の「ほどよい」ミックスで、今後も俳句を満喫していきたい。

目　次

「ほどよい」のススメ　遠藤寛子　1
諸家近詠　2〜3
私の感銘句　4〜7
津田沼研究句会報告　8
青葉研究句会報告　8
柏研究句会報告　8
君津研究句会報告　8
いすみ安房研究句会報告　8
強化部だより　9
会員・会友の近況　9
図書紹介・掲示板　10

千葉県現代俳句協会会報

諸家近詠

白詰草ＱＲコードに紛れ込む　羽村美和子
花菖蒲風吹くたびに青いジャズ
むささびを見た夜は青い眠り薬
目交に狐火が棲む帰還兵　並木　邑人

天病むと詠みし世つづく不知火忌
逃水と合わせ鏡の国政と
千葉駅のつばめ子育ては親育て
蘆火燃え上る平時とはいつのこと　松村　五月

ハンカチに包むきれいなさようなら
純粋にさくら色なる夜の桜
あたたかき子宮をもちて雪女郎
深々と冬の椅子あり純喫茶　中嶋　三雄

月読の森はこんもり緑の夜
めまとひや文士崩れの寺男
虫籌待つこと長く女来ぬ
コスモスの揺れ少年は飛びたがり　菱木　良一

子供らの決め兼ねている子猫の名
黄砂降る空に国境の線はなく
夕蟬や湖底に沈む村役場
冬座敷客帰りたり壺一つ　中村　冬美

春眠の真中でゆれる縄梯子
家紋より抜けて満開桐の花
からくりの種をこぼして鳳仙花
吊し柿ひとつひとつの自己主張　細根　栞

ミスターは永久にミスター雲の峰
十薬に埋もれときどき健忘症
空蟬が知っている私の行方
夕焼けも小焼けも戦後八十年　三宅たくみ

春衣体で風を受けるため
シャリシャリと崩すクリームソーダの恋
秋の雨ジムノペディのＤマイナー
冬夕焼ペナルティキックの熱残る　三浦　侃

取り分けし箸の残り香桜餅
ジュジュジュジュと海が焼けるよ夏入日
鼻寄せるマシュマロの頬星月夜
真夜中も韋駄天走り神の旅　松澤　伸佳

法律の隅っこにある沈丁花
ニッパーとラジオペンチや夏休み
解散や寒露の水の間に合わず
湯たんぽ出す遠くに鐘を聞きながら　野口　京子

源流は一つ銀河に合流す
大人の放課後はんざきに会いに行く
芋の露ほどの曖昧ふところに
編みかけの毛糸全部を忘れたい　長井　寛

天も地もこんがらがって熱帯夜
ゴーシュ弾くセロにも似たる兜虫
引力に諍う静寂青林檎
有情とは水甕に浮く白目高　浪岡　玄

百年は降りないつもりハンモック
穴惑い地球はたつた一つなり
手を挙げた訳ぢやないのに鵙の贄
みな降りてくる月光の滑り台　藤田　富江

鍬立ててチューリップのある立ち話
某日某所夏霧に連れられて
空爆の細く窓開け梅雨の月
やまものおとぎの国へ数珠つなぎ　松本　千花

バスで塗るハンドクリーム花の冷え
春キャベツに巻かれたいんだ月の石
誕生日じゃない方の子につくしんぼ
亜流として歩むとしてもサングラス　林　ゆみ

十二月八日廊下のない家に
雛人形現の庭を見せてやる
風五月青いきりんの群れにあう
水槽は金魚のなみだ溢れそう　宮　たかし

走り茶や五臓六腑の晴れ渡る
漂泊三人それぞれのソーダ水
甚平を着て太っ腹と思われる
ばあちゃんの命繋がる南風　藤好　良

出アフリカ後六万年ぞ着ぶくれて
一茶の生き方時雨の歩き方
翳りゆく製造ジャパン花埃
文字といふ巨大な兵器花の種

諸家近詠

村田　珠子

般若波羅蜜飴玉に蟻の列
バナナの曲線少年に開かずの間
延命はしない夜長のペンの音
もてなしのひとつ白鳥帰る空

森　孝子

節くれた指に日を溜め草を摘む
俳論の煮詰って来し花見酒
桜散る風の涙となりて散る
和菓子屋がいろいろ作る初夏の景

長濵　聰子

現し世の露を蒐めて象の耳
退く波の足裏に力雲の峰
片足は浄土片足は蟬の穴
天も地も病む大寒の土踏まず

馬場　馬子

菖蒲湯の児高い高いと祖母笑顔
地上と地下鉄道交差濃紫陽花
花栗の匂ふ風あり散歩道
熱中症に気を付けてよと娘の電話

星野　一惠

足指のグーパー体操山笑う
春光へ転ぶばかりにスニーカー
混沌のリアルとフェイク花ふぶく
夏の鴨東京暮らしが水に合う

元橋　孝之

花馬酔木水琴窟に耳とられ
羅針盤のなき定年後かんこ鳥
ががんぼの仮の世映す三面鏡
紫陽花や山の彩り寺覆ふ

保坂　末子

父祖の地に重機の唸り草の花
残されし時間へぬらり夜の金魚
草毟るうまくいく日もいかぬ日も
万策の尽きて毛虫の丸くなる

森井美惠子

初明かり犬吠の水脈とらへけり
病む人へすりおろしりんご春障子
半夏雨誰にも告げず宿しけり
のこぎりを挽く月光はこなごなと

福田志津子

病む友へ和紙に滲ます春の色
ふはり来てさびしさ置きて揚羽蝶
秋涼や妣の衣解けば肩に声
暗闇も闇にあらずや虫しぐれ

永妻　和子

ぶらぶらとほたる袋の眠たげに
牛蛙会話の途中水を差す
せせらぎの音も加わる冷そうめん
夏の山小屋窓全開に風通す

松岡　節子

白式部添へたり妻のデスマスク
投了の少年の黙冴返る
結願とよ公魚の鰭透き通る
五月鯉未来無窮と思ひし日

増田　元子

のどけしや路上ライブは青春歌
花びらの片寄って落つ二段堰
若葉風大きく吸ってチョコバナナ
高階にシフォンケーキを崩し初夏

中山　皓雪

背中から老いて雛を仕舞ひけり
卆寿すぎ歩めば白寿亀なけり
冷奴角から崩す吾が余生
能登半島千の植田と千の風

中西布美子

野馬追いを話す訛りの父よ好き
青葉木菟へっついふたつ赫と
盆の宵弟父と語り来る
立夏絵画館足音強くたつ奥に

森須　蘭

決められぬものの多さよ盂蘭盆会
液晶を滑る指また日雷
梅雨明けへ南京錠を開ける音
空の蓋あっけらかんと取れて夏

増田　豊子

有明の重き空色昭和の日
足強く鍛へる八十八夜かな
弟に会へる明日や髪洗ふ
小満の俳句を作る詞海かな

政成　一行

ままごと派も積み木派も喜寿　合歓降る庭
肺もまた喜寿　お疲れさまのハーブティー
吸うて五歩吐いては七歩　赤とんぼ
稲穂ゆれジャワジャワ走り　去る二頭

前島きんや

炎昼やプラットホームの介助犬
腹ペコの野良猫来たる網戸かな
夏草や実験動物慰霊塔
カンカン帽の斜め人間探求派

私の感銘句

	作者名	号	頁
徳田　悠子			
川岸の迷路のような夏料理	岡田芙美子	152	2
測量の声の昂り冬に入る	小野富美子	152	3
桜蘂降る真夜中の非常口	坂間　恒子	153	8
たましいのはじめのみどり芹薺	清水　　伶	153	9
曼荼羅を抜け出たがっている夏蚕	並木　邑人	154	2
月明に開く天守の設計図	中嶋　三雄	154	2
田の神の息ぎつしりと今年米	宮下　奈緒	155	4
田の神の息ぎつしりと今年米　宮下　奈緒			
初心忘るべからず、稲、瑞穂の国への祈りをすっかりもう片隅へ。本当は一晩踊り明かしても足りない位の感謝の心。ぎっしりという言葉に凝縮された感がある。			
増田　豊子			
さくらさくら原罪とやら初期化せり	並木　邑人	154	2
春の陽や草の匂ひの紙コップ	林　みさき	154	2
身の内に蟬の音止まぬ木が一本	星野　一惠	154	3
ががんぼの足が押さえて世界地図	羽村美和子	154	3
子供の日何処にも子供の影見えず	戸邉　光一	155	4
田の神の息ぎつしりと今年米	宮下　奈緒	155	4
殻焚くや長生村の葉ぼっち	安井　三緒	155	5
さくらさくら原罪とやら初期化せり	並木　邑人		
そもそも人間は生れ出たことで罪深い。人間はとてもすぐれた脳・格好を賜った。どこまでいくかわからない。そこでリセットして初心に初期化しなければならない。			
浪岡　玄			
紙に裏おもて晩夏にうしろ髪	黒澤　雅代	152	4
たましいのはじめのみどり芹薺	清水　　伶	153	9
引力の薄らぐあたり葱坊主	塩野谷　仁	153	9
八月の空から落下千羽鶴	高桑婦美子	153	9
抽象で描けと鮟鱇が口ひらく	小林　　実	153	9
梟の眼のなかにゐる動けない	千葉　信子	154	2
調律は自由海の日の海が鳴る	木之下みゆき	155	5
森　孝子			
小春日や半熟卵のごとく居る	前田　孝子	152	2
数へ日や最後の指を重く折る	浦野　五郎	152	3
バーボンのグラスに冬の霧流れ	越野　雄治	152	4
新刊の俳句の森にいる夜長	石井紀美子	152	5
海鳴りは地球の軋み寒椿	徳吉洋二郎	154	2
身の内に蟬の音止まぬ木が一本	星野　一惠	154	3
とんとんと今の過ぎをり草の花	山﨑　幸子	155	4
米村　静枝			
新涼の珈琲今日を組み立てる	興津　恭子	152	4
水澄むや序の舞のごと鷺歩む	神作　仁子	152	5
たましいのはじめのみどり芹薺	清水　　伶	153	9
白椿落ちて天向く矜恃あり	高久　清美	153	9
父の顔知らぬ我が手に蛍来る	菱木　良一	154	2
花石榴晩学と言ふ道の果て	元橋　孝之	155	4
楼蘭はいまもまぼろし黄砂降る	山口　彩子	155	4
阿部さくら			
手のひらに木の実の微熱夕日落つ	前田　孝子	152	2
葉唐辛子愚痴の煮詰まる落とし蓋	泉　志眞子	152	3
たましいのはじめのみどり芹薺	清水　　伶	153	9
太陽を抱きて果てる油蟬	重田　忠雄	153	9
ほんたうは火の鳥の舌椿落つ	千葉　信子	154	2
田の神の息ぎつしりと今年米	宮下　奈緒	155	4
熱を吐く天の歯ぎしりカンナ燃ゆ	森　　孝子	155	5
鹿兒嶋俊之			
萩の雨ねずみ泣きする博多帯	泉　志眞子	152	3
蜘蛛の糸平和はいつも宙ぶらりん	金子　未完	152	4
煩悩の捨て所なく懐手	鈴木まんぼう	153	8
吊るし雛褒めつつ脈をとるナース	鈴木　房州	153	9
卯の花腐し修正液の蓋の音	増田　豊子	154	2
田の神の息ぎつしりと今年米	宮下　奈緒	155	4
肩甲骨から秋風になってゆく	森須　　蘭	155	5
肩甲骨から秋風になってゆく　森須　蘭			
後ろから秋の風がさわやかに吹いた。その一瞬を捉えてこの句に表現された感性に脱帽しました。見習いたいと思います。			
澤田　寿一			
名月に潰されさうな空き家かな	渡部　　健	152	2
来し方をほぐし毛糸を編み直す	川上　典子	152	3
ヒヤシンス古いピアノを歌わせる	佐藤　禎子	153	8
吊るし雛褒めつつ脈をとるナース	鈴木　房州	153	9
思いきり回転ドアを押せば夏	星野　一惠	154	3
一滴を効かせ新茶の薄みどり	富澤さち子	155	4
海底の戦艦叫ぶ赤のまま	吉田　耕史	155	4
金　蘭			
背信をポインセチアは見てをりぬ	浦野　五郎	152	3

乱丁の少女期ポインセチア真っ赤　小野富美子　152 3
靴底にガムが張りつく敗戦日　神作　仁子　152 5
被災地の子どもら雛の泥洗ふ　髙橋　節夫　153 8
大賀蓮ポンと音たて背筋たて　鈴木まんぼう　153 8
海底幾年プラゴミの大花野　森井美惠子　155 4
鉄棒の子ら万緑を蹴りあげる　阿部さくら　155 5

池田　博臣

耳鳴りや海底に鮫ねむらせて　大見　充子　152 2
手花火の使いきれない一生涯　渡辺　澄　152 3
バーボンのグラスに冬の霧流れ　越野　雄治　152 4
煩悩の捨て所なく懐手　鈴木まんぼう　153 8
瞳をひらく人形八十八夜寒　塩野谷　仁　153 9
抽象で描けと鮟鱇が口ひらく　小林　実　153 9
髪長きを一つに箸置きは椿　森井美惠子　155 4

興津　恭子

種袋振れば未来の音がする　國分　三德　152 2
知恵の輪のような古鍵寒の月　倉持　紀子　152 5
石楠花の寺に移した住民票　澤田　寿一　153 8
八月の空から落下千羽鶴　髙桑婦美子　153 9
田の神の息ぎつしりと今年米　宮下　奈緒　155 4
楼蘭はいまもまぼろし黄砂降る　山口　彩子　155 4
二軒目に探す書のあり涼新た　森　孝子　155 5

髙野　春子

白菜や母の高さで塩を振る　秋谷　菊野　152 3
マロングラッセほろと崩るる寒の入り　上野　紫泉　152 4
秋灯を消しても地図の海青し　越野　雄治　152 4
生きてると能登枯露柿の便りかな　高木　一惠　153 8
菜の花のまどろみに似て死もありぬ　下村　洋子　153 8
手長猿揺らして移る秋の雲　宮下　奈緒　155 4
肩甲骨から秋風になってゆく　森須　蘭　155 5

吉岡　一三

民法に違反している帰り花　小野　功　152 2
蜘蛛の糸平和はいつも宙ぶらりん　金子　未完　152 4
雪暗や終の栖にストレッチ　渡邉マミヲ　153 8
啓蟄や男ばかりの京都弁　五味ちひろ　153 9
月におります電話に出られません　浪岡　玄　154 3
村雨来る一喜一憂はやいはやい　山中　葛子　155 5
調律は自由海の日の海が鳴る　木之下みゆき　155 5

横山　郁子

無きはづの妬心かすかに夜の百合　上野　紫泉　152 4
紅葉はら紅葉はらひら無言館　東　國人　152 5
「またひとがしぬ」ラッパーは春に　島田　翠松　153 8
抽象で描けと鮟鱇が口ひらく　小林　実　153 9
ビー玉のころがつてくる原爆忌　千葉　信子　154 2
偕老の日々の囲炉裡を開きけり　森井美惠子　155 4
人嫌いして人恋し栗の花　山口　彩子　155 4

上野　紫泉

風の夜のホットミルクと修司の詩　川守田美智子　152 3
来し方をほぐし毛糸を編み直す　川上　典子　152 3
ラテアート色なき風も綾をなす　栗山美津子　152 5
山の上ホテル惜春の鐘が鳴る　篠田　京子　153 8
八月の空から落下千羽鶴　高桑婦美子　153 9
しゃぼん玉天上はどこも自由席　徳吉洋二郎　154 2
花石榴晩学と言ふ道の果て　元橋　孝之　155 4

石井紀美子

小春日や半熟卵のごとく居る　前田　孝子　152 2
裸木やどこで落とした知恵袋　泉　志眞子　152 3
水の綺羅日溜りの綺羅冬ざくら　荒木　洋子　152 4
ひまそうな猫と目が合う冬至の日　小野　裕文　152 5
桜蘂降る真夜中の非常口　坂間　恒子　153 8
手を貸して欲しいジゴクノカマノフタ　髙野　春子　153 9
秋の蜘蛛文士は糸を吐き続け　木之下みゆき　155 5

川上　典子

白菜や母の高さで塩を振る　秋谷　菊野　152 3
水の綺羅日溜りの綺羅冬ざくら　荒木　洋子　152 4
花冷えやこんなに重いボールペン　倉岡　けい　152 5
誕生日忘れた母に花衣　佐藤　直子　153 9
蜘蛛の囲や降り立つ駅は過疎の町　三浦　侃　155 4
嫌いでしょ開口一番春疾風　山崎　公子　155 5
調律は自由海の日の海が鳴る　木之下みゆき　155 5
誕生日忘れた母に花衣　佐藤　直子

身に沁みる句です。私も、今は亡き母に、私好みの明るい色の洋服をよく買いました。母に買った服を、「おかあさん」と心の中で呼びかけながら、今は私が着ています。

袴田　菊子

なんとなくしぐれが来そう猫を抱く　窪田　俊作　152 4
梟や記憶つぎはぐ針ひとつ　石井　浩美　152 5
自画像をはがせば見える大花野　下村　洋子　153 8
轉りのなかあざやかな人嫌い　塩野谷　仁　153 9
鵙猛る俺の骨ならくれてやる　細根　栞　154 3

月見草きのうの錆びた昼がある　羽村美和子　1543
調律は自由海の日の海が鳴る　木之下みゆき　1555

伊与田すみ

だれも年寄るみんな年寄る雪残る　秋尾　敏　1522
諾々と生きて柚子湯を溢れしむ　小野富美子　1523
三本の輸液の落差冬の夜半　内田　庵茂　1538
極楽でも地獄でもなく日向ぼこ　鈴木まんぼう　1538
袖いつも濡れていた母芋の露　髙野　春子　1539
日本に住めるよろこび春霞　髙橋　宗史　1542
蜘蛛の囲の蜘蛛と目の合ふ殺せない　阿部さくら　1555

倉持　紀子

故にクレソンせせらぎを独り占め　富澤さち子　1554
田に神を呼ぶため春の水を張る　戸邉　光一　1554
鰻焼く煙は呪文石となる　三浦　侃　1554
銀河には顔覚えなき父の居る　山﨑　幸子　1554
八重といふ風の重たき酔芙蓉　森井美惠子　1554
調律は自由海の日の海が鳴る　木之下みゆき　1555
老いながら半透明に晩夏逝く　山中　葛子　1555
故にクレソンせせらぎを独り占め　富澤さち子　1555

枯れ色の残る岸辺。春の息吹に満々のクレソンは、濃緑の勢いで川面を染めて、透き通る水にクレソンを揺らす春光、軽快な瀬音と相俟って一人楽しむ春の一幕です。

増田　元子

過去形できらきら喋る冬木の芽　和田　三枝　1524
滝落ちて垂直の風生まれけり　飯塚　宣子　1524
吊るし雛褒めつつ脈をとるナース　鈴木　房州　1539
一人で一泊そらまめさんの絵本　橋本志津子　1542
億年と言う時埋めて化石立つ　島　隆史　1542
田に神を呼ぶため春の水を張る　戸邉　光一　1554
驢馬は耳痒し痒しと梅雨兆す　木之下みゆき　1555

徳吉洋二郎

普通の木に普通の鳥の来て日永　黒澤　雅代　1524
去年より少し小さき揚羽くる　なかもと淑子　1525
抽象で描けと鮟鱇が口ひらく　小林　実　1539
天と地を丸洗いして風光る　椎名　鳳人　1542
線描の裸婦の息づく聖五月　中村　冬美　1543
この先の不安をかくす夏帽子　森　孝子　1555
厚底の中は空洞夏休み　鈴木卯ノ花　1555

早乙女洋子

新刊の俳句の森にいる夜長　石井紀美子　1525
実むらさき声だすものに群鶏図　坂間　恒子　1538
永遠に春の暮なり土星に輪　清水　伶　1539
海鳴りは地球の軋み寒椿　徳吉洋二郎　1542
曼荼羅を抜け出たがっている夏蚕　並木　邑人　1542
春潮に磨かれている舫い船　中村　博子　1543
楼蘭はいまもまぼろし黄砂降る　山口　彩子　1554

島　隆史

来し方をほぐし毛糸を編み直す　川上　典子　1523
水の綺羅日溜りの綺羅冬ざくら　荒木　洋子　1524
人間が蝶々になれる試着室　金子　未完　1524
しゃぼん玉天上はどこも自由席　徳吉洋二郎　1542
草引けば要の石に朝が来る　永妻　和子　1543
一滴を効かせ新茶の薄みどり　富澤さち子　1554
秋の蜘蛛文士は糸を吐き続け　木之下みゆき　1555
水の綺羅日溜りの綺羅冬ざくら　荒木　洋子

川面の水の輝き、縁側の日溜りのほっとする暖かさ。冬ざくらは十月から十二月にかけて咲き、四月にも花を咲かせます。句として、非常にリズミカルに表現されていると思いました。

松本　千花

あぶくがひとつ赤い金魚の嘘ひとつ　川上　典子　1523
白菜や母の高さで塩を振る　秋谷　菊野　1523
背信をポインセチアは見てをりぬ　浦野　五郎　1523
森の婚はじまる烏瓜の花　石井紀美子　1525
ほんたうは火の鳥の舌椿落つ　千葉　信子　1542
空っぽになりたし雨は暖かし　松村　五月　1542
だしぬけに月が綺麗と言はれても　宮本美津江　1554
だしぬけに月が綺麗と言はれても

だしぬけに言われた「月が綺麗」。もしかしたら「I love you」ということでしょうか。どうしましょう！

末廣　陽恵

鉦叩き明日を伸ばす検診日　澤田　寿一　1538
目を癒す水若水となる朝　杉山真佐子　1539
春潮をすする岩鼻わが流寓　並木　邑人　1542
再会はレトロな駅や夏柳　永妻　和子　1543
渋沢人気酷暑日の新紙幣　野口　京子　1543
萍や地球は笑窪溢れおり　三浦　侃　1554
驢馬は耳痒し痒しと梅雨兆す　木之下みゆき　1555

森須　蘭

スクランブル交差点赤鳥雲に　片岡　秀樹　153 8
王女のひかがみを出で瑠璃蛺蝶　清水　伶　153 9
風ありや無きや木犀が近い　髙橋　宗史　154 2
曲線の少し尖った梅雨蛍　野口　京子　154 3
月見草きのうの錆びた昼がある　羽村美和子　154 3
病むときは屈んで耐えよ冬すみれ　吉田　耕史　155 4
よく動く奏者の眉やクリスマス　安井　三緒　155 5
王女のひかがみを出で瑠璃蛺蝶　清水　伶

恥ずかしいことに、最初、「瑠璃蛺蝶（ルリタテハ）が読めなかった。女王ではなく、王女が良い。うら若き高貴な女性の膕（ひかがみ）から生まれ出るルリタテハの神秘が綺麗だ。膕とは、膝の裏にある窪みのことである。視点をそこに焦点を当てたのが稀有。

富澤さち子

来し方をほぐし毛糸を編み直す　川上　典子　152 3
新涼の珈琲今日を組み立てる　興津　恭子　152 4
「イマジン」は褪することなし去年今年　渡邉　竹庵　152 5
たましいのはじめのみどり芹薺　清水　伶　153 9
耳もとで風の口笛クリスマス　佐藤　直子　153 9
地に問えば天に声あり沙羅の花　永妻　和子　154 3
夏羽織するり噺は佳境へと　増田　元子　154 3

渡邉マミヲ

銀河濃しときどき神を身近かにす　黒澤　雅代　152 4
梟や記憶つぎはぐ針ひとつ　石井　浩美　152 5
大寒の黒の鎮もる樂茶碗　神作　仁子　152 5
山頂に石ひとつ積む我の秋　小林　毘七　153 8
春の陽や草の匂ひの紙コップ　林　みさき　154 2
空といふ出口ひろびろ夏休み　浪岡　玄　154 3
線描の裸婦の息づく聖五月　中村　冬美　154 3
春の陽や草の匂ひの紙コップ　林　みさき

春の暖かな光線そして草上にひしゃげた紙コップ。取り合わせが魅力的です。物語が始まりそうです。

吉田　耕史

自画像をはがせば見える大花野　下村　洋子　153 8
コーヒー一杯そろそろ菫咲く頃か　小林　実　153 9
抗いのすがた曠野の冬すみれ　髙橋　宗史　154 2
ビー玉のころがつてくる原爆忌　千葉　信子　154 2
ががんぼの足が押さえて世界地図　羽村美和子　154 3
七月の空の隙借りシーツ乾す　山﨑　幸子　155 4
老いながら半透明に晩夏逝く　山中　葛子　155 5
老いながら半透明に晩夏逝く　山中　葛子

人間が老いてゆくのは仕方のないことだが、それでも自分らしく生きてゆきたいもの。老いてゆくのが半透明だと作者は言い切る。時は今は晩夏。それが終ればきびしい冬が来る。そうした彼方を見据えて挑もうとしている。

永妻　和子

転んでも笑って立つ子チューリップ　川上　典子　152 3
裸木やどこで落とした知恵袋　泉　志眞子　152 3
赤とんぼドローン爆撃など知らず　吉岡　一三　155 4
病むときは屈んで耐えよ冬すみれ　吉田　耕史　155 4
振り返らず日暮れは花のいちもんめ　山中　葛子　155 5
白紫陽花うそつく前の深呼吸　鈴木卯ノ花　155 5
胡瓜もぎ青い地球を丸かじり　阿部さくら　155 5
胡瓜もぎ青い地球を丸かじり　阿部さくら

昨年の厳しい暑さに定番となった胡瓜の献立でした。幼き頃に台所でとんとん刻む音と、香りに目が覚めた記憶が甦ります。青い地球と胡瓜が、爽やかに共鳴いたしました。我が家の冷蔵庫に大好きな胡瓜が鎮座しています。

泉　志眞子

小春日や半熟卵のごとく居る　前田　孝子　152 2
人間が蝶々になれる試着室　金子　未完　152 4
白木槿死よりも老いを恐れをり　鈴木まんぼう　153 8
菜の花のまどろみに似て死もありぬ　下村　洋子　153 8
天と地を丸洗いして風光る　椎名　鳳人　154 2
しゃぼん玉天上はどこも自由席　徳吉洋二郎　154 2
父の顔知らぬ我が手に蛍来る　菱木　良一　154 2

宮　たかし

諾々と生きて柚子湯を溢れしむ　小野富美子　152 3
風の夜のホットミルクと修司の詩　川守田美智子　152 3
穏やかな海鼠の時を覗き込む　蛭名　節昌　152 4
極楽でも地獄でもなく日向ぼこ　鈴木まんぼう　153 8
自画像をはがせば見える大花野　下村　洋子　153 8
天と地を丸洗いして風光る　椎名　鳳人　154 2
下総の水湧くところ夏兆す　中村　博子　154 3
諾々と生きて柚子湯を溢れしむ　小野富美子

組織の中で仕事し、まず人の気持ちを考える習慣があった。退職してもっと自由に生きていいんだと思っている。年末に湯舟につかり人生を振り返り溢れる湯に力をもらっている。作者は夫への思いを綴ったのかも？

❑❑ 津田沼研究句会報告 ❑❑

●第三九二回（令和七年五月十三日）
（於：津田沼一丁目町会会館）
司会　小林　実

風鈴鳴る会いたいときは風になる　小林　実
OBらジャズ揚々と若葉風　大喜　京香
法案という四角い餡こ柏餅　鈴木　瑩子
主流の憂いの晴れし立夏かな　宮　たかし
逃水や大正浪漫のあと昭和　池田　博臣
春風やせめて高尾に連れてつて　渡辺しげ子
鬣を整えアイリスの街へ　並木　邑人
こいのぼりここはまだまだ米の国　白木　暢子
春驟雨走る男の背なに鰭　栗原　正子
桜蕊降る水飲場風渡る　股野　久子
急いでいるつもり毛虫もこもこゼブラゾーン　星野　一惠
新婚の写真の母や花辛夷　増田　豊子
浮世絵の美学は古し赤目樫　高木　一惠
短夜の禅より生まる救世観音　長井　寛
卯ノ花腐し駅までの父の見送り　伊与田すみ
ただ歩く青葉したたる知らぬ町　なかもと淑子
憲法記念日ジーパンの裾繕う　徳吉洋二郎

❑❑ 青葉研究句会報告 ❑❑

●第一六〇回（令和七年五月二十二日）
青葉句会吟行
吟行地　新宿区立漱石山房記念館

思慕の権化花ざくろ真っ赤　栗原　正子
「百年待って下さい」梅雨を書き替える　並木　邑人
文豪の髭重からん花柘榴　越野　雄治
猫舌にあらず文豪花石榴　長井　寛
梵鐘に鋳物師の名あり刺繍花　徳吉洋二郎
猫塚と五月の空とドット靴　森井美惠子
葉桜や天に積み上ぐ猫の墓　加賀谷秀男
花芭蕉牛歩で巡る記念館　石井紀美子
抱えれば猫身をよじる花柘榴　横山　郁子

❑❑ 柏研究句会報告 ❑❑

●第一四七回（令和七年七月十二日）
（於：柏市ハックルベリー書店）
司会　長井　寛

喜寿見えて百までの憂さ冷奴　藤好　良
戦なき世をゆらゆらと生き昼寝　松澤　龍一
夕焼にいのちの滅び学びけり　下村　洋子
爺になり爺様を知る蟻地獄　小野　功
涅槃図の幽かな寝息夏椿　長井　寛
丸い消印七月を押し潰す　野口　京子
木陰十五分畑仕事十五分　岡田　春人
ナーダムや草原の国総立ちに　木之下みゆき

❑❑ 君津研究句会報告 ❑❑

●第六十四回（令和七年七月三日）
（於：君津市生涯学習交流センター）
司会　徳吉洋二郎

高層に水母の泳ぐ深夜かな　越野　雄治
肋骨の錆ゆく気配梅雨曇り　前田　孝子
まだ骨になってたまるか蛍の火　東　國人
八重葎増えることなき骨密度　大地　節子
尺寸の余生へひらく白日傘　長濵　聰子
骨埋める故郷遠く羽抜鳥　古賀　壽昭
骨が泣く白寿の体操夏に入る　村田　満枝
湯上りの鎖骨がゆるむ合歓の花　石井紀美子
祭り笛神の化身は土の民　山田たかし
印籠の現の証拠や鼓笛隊　長井　寛
骨抜きの蛇衣を脱ぐ恋のため　泉　志眞子
二人だけの会話のよう団扇風　羽矢　眞人
骨肉の剥落の容滝しぶき　徳吉洋二郎
留守居猫冷房病に悩まされ　小澤　富子
日向水鎖骨のくぼみ夕陽かな　北野　耕兵
盲目の犬を褒めたる聖五月　佐藤　鮎美
折れ易き望み支える夏木立　森　孝子
骨相は縄文弥生？藻刈舟　並木　邑人

❑❑ いすみ安房研究句会報告 ❑❑

●第九回（令和七年七月二十七日）
（於：勝浦「藤屋そば店」）
司会　東　國人

黒揚羽一瞬火の粉と入れ替わる　坂間　恒子
もう泳ぐことのない海を見ている　柴田　洋郎
ふんわかと故郷やさし氷室饅頭　徳田　悠子
牛蛙誠心深度淡くして　並木　邑人
苔の花そろそろ星へ還る頃　鈴木卯ノ花
土砂降りに負けまいとジャンプ傘　白木　暢子
眼裏に伊富魚飛び交う尻別川　吉田　耕史
夕涼み門外したような風　石井紀美子
花仙人掌言葉に棘のある漢　東　國人
こめかみに海月棲みつく半音階　羽村美和子
一〇二歳の永眠青林檎　髙橋　宗史
青栗の備わってゆく自己防衛　長井　寛
渡河ナレバ風ノ宿出テ風ノ瘤　政成　一行

強化部だより

千葉県現代俳句協会青年部活動報告

夏雲ネット句会隔月実施。（次回九月）年二回吟行会実施。（次回十一月）参加希望の方はご連絡を。六十歳以上は準会員。kokomiya2003@yahoo.co.jp（青年部・三宅）

堀切菖蒲園吟行会（六月七日）

一人一句抜粋

白菖蒲蘇生の謎謎あずけっぱなし　並木　邑人
宙の名のファンタスティック花菖蒲　森井美惠子
花殻を摘む男あり菖蒲圃に　白木　暢子
昔より宇宙まで行く花菖蒲　三宅たくみ
花菖蒲風吹くたびに青いジャズ　羽村美和子
花菖蒲分かれた分かれた選択肢　青野　友香
花菖蒲名前に秘めし恋いくつ　木之下みゆき
美人画の俯く理由花菖蒲　遠藤　寛子

菖蒲園は満開。駅からの道すがら紫陽花も楽しみました。

第十回あしたば句会（七月開催）

一人一句抜粋　兼題「滝」「木」

最上階で秘書をしてます熱帯魚　羽村美和子
七夕の前夜カーナビの履歴消す　森井美惠子
鉄塔のジージー鳴って梅雨深し　三宅たくみ
台風五号雑木林が一つ消え　白木　暢子
幾重にも余韻連ねて滝巡り　遠藤　寛子
濃紫陽花青の時代を貫けり　東　國人
夏の夜は見過ぎるほどの夢をどうぞ　無　子
気付かないふりを貫くアマリリス　陸野　良美
日焼して今が晩年コカコーラ　石井　稔
夏の蝶闘病の吾にも止まりけり　佐藤　鮎美
背景としてのわたくし滝落ちる　鈴木卯ノ花

（遠藤寛子　記）

初心者講座　第三期　第三回～五回

核要らぬ東西南北アマリリス　横須賀弘子
カサブランカ蕾の中の秘密漏れ　荻野由美子
向日葵のカッと罪業見透かして　栗原　正子
ねむり草抱えきれない明日がある　鈴木卯ノ花
大花火握ってきた手握りしめ　佐藤　憲一
水中花カモフラージュはお手のもの　宮原　青佳

八月より新しい仲間が加わり、教室の雰囲気が更に明るくなりました。新しく入られた方は全くの初心者ですが、熱心に独学をして来られたとのこと。しかしその日の講座終了後、自分が思っていることがきちんと伝わるということは難しいと言われ、担当者としては逆にその言葉を嬉しく思ったことでした。

まずは自分の思いが最低限読み手に伝わるかということを、大切にしたいものです。独りよがりほど怖いものはありません。言葉に敏感な人は、言葉による新しい世界と新しい自分を発見する事が出来ます。それが出来る俳句文芸の素晴らしさを思います。今という時代を呼吸している俳句を作りたいものです。

（羽村美和子　記）

千葉県現代俳句協会第三回高校生俳句大会

募集期間が昨年と異なった為、本年は令和七年三月末に各高校へ募集要項をお送りした。「一般の部」は投句締切が八月十九日であったが、学校は夏休みの真っ只中。投句締切は夏休み明けの九月十日（水）とした。長かった夏季休業中の力作一篇（句）を送って戴くという目論見である。基本的には各高校の先生方のお力を借りて、学校単位で集約するが、千葉県現代俳句協会青年部を中心としたSNSへの個人の応募も可能。その後、千葉県現代俳句協会役員による選句、選考委員会を経て顕彰する。今年も若い力の台頭により、優れて刺激的な俳句作品に出会えるに違いない。

個人用　送り先
〒278－0043 野田市清水527－10　髙橋宗史　宛

《会員・会友の近況》

・一五七号を頂きました。いつもお世話様です。誌上でお名前の熟知した方の訃報、また退会の報を見るのはとても残念です。（中嶋　三雄）

・思いや感情に追いつかない、又、表現できないやるせなさをひしひしと感じています。今日という日を大切に過ごしたいと思っています。（森　孝子）

・去年の暮に転び骨折、リハビリ中です。俳句に助けられております。（長濱　聰子）

・膝関節痛と腰痛で外出が儘ならず、自愛しております。（馬場　馬子）

・施設に入所して十年。昨年夫の七回忌を済ませました。月・火・水・金と九時から一時間リハビリ体操をしております。九十五歳。頭と体まだ健在です。（中山　皓雪）

・猛暑です。呉々も皆様お大事にお過ごしください。光の強さに目を痛めました。（中西布美子）

※現代俳句協会令和七年度 会費納入はもう、お済みでしょうか？

会費の一部は、千葉県現代俳句協会の活動費の原資となっています。まだの方は、お早めにお納め願います。払い込み用紙を紛失された方は本部事務局へ請求してください。

四十五周年記念基金参加御礼（四次）

（一口二千円・敬称略・八月十五日 現在）

（三口）安井三緒・川上典子（追加）
（五口）吉田耕史・篠田京子
（十口）石井 稔
（二十五口）秋尾 敏・徳吉洋二郎

※基金一次分 一四〇、〇〇〇円
基金二次分 二三六、〇〇〇円
基金三次分 二一五、〇〇〇円
基金四次分 一五二、〇〇〇円
計 七四三、〇〇〇円

基金募集期間 令和七年十月十日まで

払込先 千葉銀行 稲毛東口支店
普通預金 3889475
口座名 千葉県現代俳句協会 会計 松本千花

●諸物価高騰の折、会員・会友の皆様方の温かいご芳志に厚く御礼申し上げます。引き続き、よろしくお願い申し上げます。

図書紹介

■**俳論集「子規に至る」秋尾 敏**

令和七年三月十五日刊 新曜社刊

正岡子規を江戸と近代の俳句を繋げた人物として描き、近代俳句誕生のドラマを「国学」という当時の世界観を軸に書き直そうとする画期的俳句論。近代俳句史の前提が変る力作。

■**作品集「清水公園界隈」髙橋 宗司（宗史）**

令和七年六月八日刊 コールサック社刊

第二の故郷、野田市への愛着と賛歌をしなやかな文学観で俳句・詩・小説に綴り続ける。

花吹雪側溝紅の棺となる
プラトニックラブじんわりと沈丁花

掲示板

《会員・会友異動》

●**退会**（会員）村上 澄子
田沼美智子

●**新会員**
小藤真由美（会員）東 國人 紹介

《令和七年度第三回幹事会》

日時 令和七年八月十九日（火）午後一時
場所 船橋市勤労市民センター
議題
一、創立四十五周年記念俳句大会について（俳句大会投句状況・今後の予定について）
二、秋の吟行会について
三、現代俳句協会（本部）の動向について
四、青年部の活動報告
五、初心者講座について
六、会報一五八号について
七、各研究会の状況について（青葉・津田沼・柏・君津・いすみ安房）
八、その他
・令和七年度後期・八年度前期予定について
・会員・会友動静
・次回幹事会 十一月十八日（火）

四十五周年記念 俳句大会のご案内

日 時 令和七年十月十二日（日）午後一時
会 場 千葉市文化センター 五階セミナー室
記念講演 池田 澄子 先生
演 題 「三橋敏雄を師として」
※応募作品の顕彰 ※大会整理費 千円
※奮ってご参加ください。大会を盛り上げましょう。

◆秋の吟行会のお知らせ

場 所 白樺派の別荘地跡と手賀沼界隈
日 時 令和七年十二月二日（火）
嘱目二句
句会場 抽選結果待機中。
判明次第ご参加の方にはご連絡申し上げます。詳しくは同封のチラシをご覧ください。初冬の手賀沼を楽しみましょう。

□□ 事務局・編集部だより □□

●四十五周年記念俳句大会も間近に迫って参りました。会員・会友の皆様方には多数俳句をご投句くださり、ご協力に深謝いたします。幹事一同、実りある記念大会を目指し、準備を進めております。猛暑の疲れが出ませんよう、皆様方のご健吟をお祈りいたします。

現代俳句千葉 第一五八号
令和七年九月一日発行
発行人 千葉県現代俳句協会
会長 羽村 美和子
現代俳句千葉編集部
〒278-0037 野田市野田六七七-一-A二一五
木之下みゆき
千葉県現代俳句協会事務局
〒299-2521 南房総市白子六七三-一
東 國人
TEL 〇四七〇-四六-二九一五
FAX 〇四七〇-四六-三〇七二